

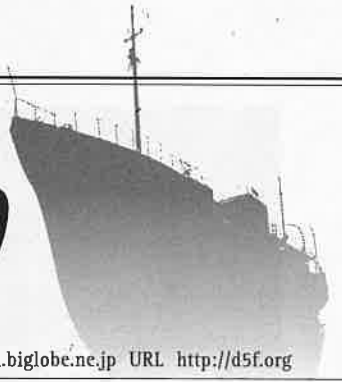
2006.03.01
No.327

(2・3月合併号)

発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org

福竜丸だより



第五福竜丸展示館開館三〇周年

第五福竜丸にゆかりの方々も来館



〈写真でたどる開館30年のあゆみ〉

久保山すずさん(右から2番目)は、七七年九月に来館され、広田重道専務理事(右側)の案内で熱心に船と展示物に見入っていました。
撮影・森下一徹

開館から三〇年、展示館の建物のその真ん中にどっしりと座る木造船・第五福竜丸。

船は被災から五二年目の三月一日をむかえ、きょうも小中高生や高齢者のグループをはじめたくさんの市民に静かに語りかけています。第五福竜丸平和協会は、六月一〇日の開館記念日にむけて記念誌「第五福竜丸展示館三〇年のあゆみ」の編集作業にかかっています。

去る一月二八日には、船の保存に尽力された方々と開館後の展示館を活用してのさまざまなお話をすすめてこられた方々にお集まりいただき座談会をおこないました。

四時間に及んだ座談会では、これまであまり語られなかった保存運動のなかでの逸話も披露され、多くの人々の第五福竜丸を大切にしたい想いを改めて気づかせてくれました。この模様は、「三〇年のあゆみ年表」とともに記念誌に収録されます。

*

開館以来、展示館には、第五福竜丸にゆかりのある多くの方々が来館しています。元乗組員では、開館三年目の一九七九年七月八日に大石又七さん、小塚博さん、鈴木隆さん、細根久雄さん、見崎進さんが来館。それに先立つ七七年九月一日には、久保山愛吉無線長の妻すずさんが訪れました(写真)。

九二年一月二九日には、斉藤明さん、小塚博さん、大石又七さんが、九七年四月には、半田四郎さんが来館しています。

漁労長見崎吉男さんは、保存がよびかけられた一九六八年三月、夢の島の船の甲板上で新聞社のインタビューに答えています。

ビキニ事件記念のつどい開かる――

第五福竜丸平和協会は、二月一八日午後、「被災52年、改めて核兵器問題を考える市民講座」と題して3・1ビキニ事件記念のつどいを開きました。

つどいは夢の島マリナーナ会議室で、七五人が参加し、中央大学の奥山修平さんと広島市立大学平和研究所の高橋博子さんが講演・報告しました。

ここでは、講演記録から奥山さんの講演の要旨を2面～5面に掲載します。また、高橋さんの報告の要旨を5～6面に掲載します（文責は編集部です）。

核・原子力の現代史と科学者―― マンハッタン計画からビキニ水爆へ

奥山 修平

過去の事実に現代的意味を

一〇年ほど前にアメリカの
スミソニアン博物館の航空宇
宙博物館が原爆展を企画しま



奥山修平さん

した。展示のコンセプトは、上空一万フィートから被爆をながめていたアメリカが、地上の爆心近くの視点もいれて両方から原爆をとらえようという、非常に理想の高いものでした。

ご存知のように在郷軍人会が展示に反対した。展示は挫折したわけです。

半世紀以上を経ても人々は、歴史の事実を解明するとか客観的に捉えることが、自分の体験も含めて非常に難しい、という気がします。過去

の事実というのは必ず現代にも意味を持っています。それを現代に生かしていけるかが問われているわけです。

特に核問題は一層厳しい課題をわれわれに突きつけていると思います。ヒロシマ・ナガサキの問いかけは、そう簡単に消えるものではない。核問題は、われわれが物事を考える時の大事な試金石になるのでは、という気がします。

三〇年代の状況

一九三〇年代というのは、二つの大きな出来事に特徴づけられます。

一つは二九年以来の大恐慌にもとづく世界同時不況です。世界資本主義の未曾有の危機です。アメリカはニューディール政策をとりますが、最後は失敗します。日本の場合は一番乱暴なことをした。自分の経済的市場を暴力的に確保しようという挙にでたわけです。

もう一つはファシズムの台頭です。このことと核兵器の問題はダイレクトには結びつきませんが、実は三〇年代の科学は大変大きな変貌を遂げ

たわけです。三二年は、ヒトラーが政権につき、日本が本格的に中国に侵略していきます。三二年は物理学では奇跡の年だといわれます。イギリスのチャドウィックが中性子を発見することにはじまり、陽電子、重水素があいついで見つけられた。つづいてフェルミのベータ崩壊理論やキュリー夫妻の人工放射能、湯川秀樹の中間子論ができあがります。

三〇年代の最後にハーンとシュトラスマンというドイツの学者がウランの核分裂をおこす。これを確認したのはフリッツシュとマイトナーでした。

こうして四〇年代に政治と核、核開発に大きく関わる人がでてくる。政治的社会的な状況と核物理の大きな変化が、同じ時期に起きた。

翻弄された科学者

政治的社会的といいましたが、ナチスによるユダヤ人迫害によって優れた科学者が数多く亡命します。

フェルミなどは、ベータ崩壊理論でノーベル賞を受賞し

ますが、自身はユダヤ人ではないのですが、奥さんがユダヤ系でイタリアから出国するビザが下りない。そこでノーベル賞の授賞式に乗じてアメリカに亡命するわけです。

フェルミは、イタリア人はコロンブスに始まりフェルミにいたるまで、アメリカに多大な貢献をしてきた」と映画ゴッド・ファーザーの中のせりふで名前がでるくらい有名なだったし歓迎されました。

しかし、多くの亡命科学者は食うや食わずで逃れてきたというのが実態で、アインシュタインやフェルミなどは例外だと思えます。

原爆の可能性

三〇年代後半のウラン核分裂発見から、多くの科学者が原子核の分裂によって莫大なエネルギーが生じるという認識をもつわけです。特にドイツでは、核物理が非常にすすんだ。この国がつぎつぎ新しい技術を導入して新しい兵器を開発することがおこった。

それがもし原爆に結びついたらどういうことになるのか（3面につづく）

(2面からつづく)

か、特に亡命したユダヤ系の科学者には大問題となった。

シラードは、ドイツより先に原爆をつくることをアメリカ政府に呼びかける文書を起草し、アインシュタインに頼みこれに署名をしてもらった。有名なアインシュタイン書簡です。アインシュタインはサインしたことを生涯悔いていたそうです。

一九三九年八月二日にサイオンをして一〇月一日に大統領に渡った。受け取ったルーズベルトは、ウラニウム諮問委員会をつくります。委員会は二、三回会合を開いただけで、爆弾は無理でも原子炉なら可能性があるだろうという諮問をするわけです。

実は、原爆開発はイギリスでの研究がアメリカに伝えられ始まったということが今日では常識になっています。四〇年二月に、フリッシュとパイエルスの二人が濃縮したウランを使うと爆弾になる可能性が高いと述べ、実際に臨界量を見積った。

これにはただちにイギリスの正規の機関(モード委員

会)が立ち上げられ検討されます。四一年秋に、このアイデアがアメリカに渡ってアメリカは本格的に原爆開発に乗り出す。ですからイギリスで研究したものがアメリカに伝えられ原爆開発につながった、ということがいまは標準的な理解になっている。

ところが、アメリカの高校などの教科書では、アインシュタイン書簡により委員会がつくられ、原爆を開発し、第二次世界大戦に勝利した、というのが普通になっていきます。

マンハッタン計画

原爆開発とはどのような特徴を持つのか、第一に従来の生産体系にないきわめて新規のものであるということ。新しいものをつくるということは新規なんじゃないかと思うかもしれませんが、飛行機にしろ潜水艦にしろ、これまででは、いままで積み上げてきた技術を応用し既存の工場を転用して軍用の生産をしてきました。

第二次世界大戦中には航空機が大量生産されますが、こ

れはフォードとかGMが手掛ける。軍用車両は、大型の車を作っていたデトロイトのダッツというメーカーがつくる。

他に転用できない新規な生産設備とはどのようなものか。例えばウランの濃縮を行うガス拡散という装置ですが、全長一キロくらいの四階建ての巨大なものです。これは既存の技術がなくて全くゼロからつくるわけです。

ケロッグとかイーストマンコダック社などが協力してつくった。いままで全くないものです。ですからこれらの工場は全部政府資金でつくる、工場の運用は、政府が丸ごと貸して生産をさせるわけです。しばしば一ドル契約と言われていて、一ドルで工場を貸して操業するという方法をとらざるを得なかったわけです。

原爆製造のために他に転用できない特殊な設備が膨大に作られたということが第一の特徴です。この設備は戦後もずっと残るわけです。

もう一つの問題は、極度の秘密性です。軍事問題という

のはなんでも秘密だといえましょう。マンハッタン計画が秘匿されていたか例をあげます。

ウランを分離するときの装置でレーストラックと名づけられていますけれど、真空タンクとイオンが飛び出すビーム、昔のテレビのブラウン管、電子銃みたいなものとそれに電磁石を置いて軌道を曲げる、電磁石と真空タンクの塊です。電磁石をつくるためには当然大量の銅のコイルが必要

終わつたらこつそりこれを戻そうというわけです。銀は一つの例ですが、こういう法の逸脱の結果、どんなことがあっても原爆を使用せねばならない、ということにつながったという説を唱える人もいます。それだけが理由ではないですが、これで、つくれなかつたら大きな責任問題があちこちに生じる。こういうことが平気で出来るほどの秘密の開発だったわけです。

原爆投下を命令したのはトルーマン大統領ですが、彼はルーズベルトが大統領に就任した直後に亡くなったので、副大統領から四五年四月一二日に大統領に就任します。

トルーマンは、副大統領に立候補する前は上院で国防計画調査委員会の委員長でした。委員会は、四一年に作られたもので、戦争中の物資の調達に適切かどうかを監視する機関です。ここではすべての軍事計画、補給、物資、武器弾薬、車両、工場兵営など軍に関するすべての調達を監視しました。彼は何百億ドル

(3面からつづく)

もの不正支出を取り返した、と自慢げに自伝に書いてます。

ところがマンハッタン計画が始まったのは四二年で、膨大なお金を使ったわけですが、トルーマンの調査委員会には全く引つかかかっていないわけです。

実は、トルーマンがマンハッタン計画の存在を知ったのは、大統領就任の直後です。陸軍長官スチムソンに呼ばれて、原爆製造について聞かされます。トルーマンは調査委員会の業績を誇っています。原爆はすっぱり抜けていた。彼の調査がいかげんだったのか、マンハッタン計画がそれほど緻密だったかはともかくとして、そういうことがおこっています。

原爆製造は、非常に特殊な研究開発だったわけですから、これはさまざまな先例をつくるのですが、例えば入札の仕方も異例で、今でいう随意契約で公開しない契約の形がおこなわれたのもこの時期で、これは戦後も残っていきます。つまりこういうシステムが

原爆から水爆へ、という新たなテーマを求めていったのも容易に考えうることです。

奇妙な時間との競争

原爆がいつ完成するか、これは純粹に科学的な技術的なことです。もちろん原爆が政治を左右するというのもあり、政治が原爆の使用を左右するというのもよく議論されます。

完成時期は最初から四五年の夏と見通していました。製造の初期からこの完成時期は揺るがず、実際にできたのは七月です。この計画にお金をだすときに戦争がいつまで続くのか、が問題になりました。四年先まで戦争は続いているのか。そうであれば開発する。膨大なお金を投入するというときに、ときのアメリカの指導者が、科学者が出来るから、強力な破壊力があるからと、それではやりましょうとは簡単にはならないのです。つまり戦争は四年は継続することと、四年後に原爆は完成するということの二つが関わって初めて決断することができたのです。

原爆は複数落とす

一九四四年六月のノルマンジー上陸作戦が成功した時点で、連合国側は、ヨーロッパの戦争は年内に終わると考えました。したがって、この時点から原爆のターゲットはドイツではなく日本しかなくなるのです。

この時期、六月から七月にかけて、原爆製造で「真夏の危機」というのがおこります。これは何かというと、原子炉というのは動けばプルトニウムが出来る。簡単にいえばプルトニウムという原料がいつペンにできる。原子炉を動かして冷却させて、放射線の量を減らし、リンサンピスマスという方法で取り出していけば、プルトニウムが量産できます。

ウランとプルトニウムの両方で原爆をつくると考えたのがこの時期でした。ウラン濃縮は、とにかく時間がかかる。プルトニウムは、一度に複数原爆ができますから、四五年七月に実験をして八月九日長崎に投下して、さらに四六年にビキニ環礁で原爆実験を

したのは全部プルトニウム爆弾です。

ところがプルトニウムは、面倒な性質をもっている。原子炉からつくられたプルトニウムの中にプルトニウム²⁴⁰が存在する。これは、自分で分裂を始めてしまうというやっかいなもので、それがあると臨界に達する前に反応がずると始まってしまふ。

簡単にいうとバンと爆発しないで、「ボヤ」で終わってしまう。これが処理できないと戦争が終わるまでにウラン爆弾一つしかできないのではな

いか、科学者の間に危機感がひろがったのです。彼らは四四年の段階では原爆はたてつづけに落とすことで効果があると認識していたのです。だから一つしか出来ないのはまさに危機だったのです。

原爆の投下は、歴史的に見て、広島に落とすだけだと降伏しないから長崎にも落とす、というのは間違いです。はじめから複数落とす計画でした。四四年の時点でもそうですし、四五年の七月の一つの命令で二つ落とすだけ

す。

原爆から何を学んだか

アメリカの科学者のなかで原爆投下について批判や意見があったことは、よくいわれています。マンハッタン計画から離脱したロートブラットの場合、フランクやシラードの抵抗などがあります。

科学者の抵抗にはスパイ容疑で逮捕する、と脅すのがこの当時の常ですね。この状態は戦争が終わった四五年の九月くらいまで続きます。ですから科学者の抵抗があったことは、戦後しばらくたってから明らかになりますが、原爆が落とされた数ヶ月の間は、物を言うことがアメリカでも許されなかったことは承知しておいていいでしょう。

原爆から何を人々が学びとったでしょうか、良い学び方もあれば悪い学び方もあります。当時の支配層にしますと、最強兵器が数年のうちにつくられたことを教訓とした人もいたわけです。つまり、人科学者というのは軍服を着ない兵士である、これを常時確保

(5面につづく)

(4面からつづく)
 しておく必要がある、これからはそういう時代なんだ」と。

ですから戦後のアメリカの科学技術政策は、軍部とシビリアンがぶつかったと言われますけれど、普通のシビリアンでおこなえる研究さえも軍が含み込んだのです。

原子力委員会が成立したときの議論で二つに分かれた派のうちシビリアン派が勝ったかのように書いてある本もあるのですけれど、実際はそうではなく、基礎研究から含めて軍が支援する体制をつくるというのが最終的な結論だった。

ただ、科学者の側は、無理やりマンハッタン計画に動員されたわけで、若い人は自分本来の研究テーマに戻りたい、というのがあった。戦後、膨大な論文がアメリカから出されたというのもこういう事情を反映しているし、批判的科学雑誌「プリティン・オブ・アトミック・サイエンティスト」などもこの時期に刊行されています。

こうした流れがでてくるな

かで、その典型として現われたのが水爆をめぐる議論です。

原子力委員会のなかの諮問委員会は水爆やめなさいという結論をだしているわけです。その結論をうけて原子力委員会も水爆はやめましょう、と結論している。ところがトルーマン大統領はそれをひっくり返して、水爆開発への道をすすむわけです。

歴史を現代に学ぶ

原爆を落としたときにトルーマンはどう思っていたかというのを見てみましょう。

広島に落とすまで長崎には落としていないとき、トルーマンは、ローマ法王庁にしかれるのではないかと気にしていたというのです。ヨーロッパの有名な修道院にナチスが立て籠もったときに、アメリカ軍が爆撃して修道院を破壊した。それで、バチカンからものすごく怒られたのです。ドレスデン爆撃でもローマ法王庁から無差別攻撃を咎められた。

アメリカ人のなかにも、シカゴ大学の学長などは、広島

への投下後、長崎の前に「アメリカは道徳的威信を失墜した」と発言している。長崎投下後でも、「原爆を落としたことに誇りを持つことなど不可能だ、恥じ入るしかない」と言っています。こういう声は多数派ではありませんが、「やりすぎだ」と考えた人も大勢いたということです。

カトリック系の雑誌のなかにも、「何十万人もの大人と子どもの言語に絶する死をもたらしたあとで、われわれは常にこの爆弾を平和を愛する人の手に置かなければならないなど全くんでもない発想だ」との記述がある。

こういう人たちがいるながらも、水爆の開発を止める可能性がどれほどあったか断言はできませんが、科学者の間でも止めるという人もいたわけ

です。トルーマンはどうであったか。水爆をつくると決めて、ビキニにもつながっていくわけですが、トルーマンの心理分析をしているアメリカの研究者によると、原爆の開発の中心の科学者オッペンハイマーが大統領に会ったとき、オ

ッペンハイマーは「自分の手は血にまみれている」と言っています。トルーマンは「いや血にまみれているのは僕のほうだから僕が責任をとる」と言ったというんです。ところがその後トルーマンは周辺に、「あんなるくでなしは二度と連れてくるな」と言うのです。

トルーマンの日記には、オッペンハイマーのことを弱虫の科学者と書いています。また、トルーマンが遺した書簡とかメモを詳細に集めた研究者が書いた本があります。「オフ・ザ・レコード」(記

録外)というんですが、それを読みますと、かなり動転している感じがあります。亡くなる間際ですが、会いに来た人に原爆を投下したことの弁解さえしている、との証言もあります。

トルーマンにしてもある躊躇があったのかもしれないが、われわれは、躊躇ではない方向に、はっきりすすむために、こうした歴史に学んではいかなければいけないのではないかと気がしております。(中央大学教授、科学技術史)

ビキニ事件にみる日米関係… 被災50年で明らかになったこと

高橋 博子

ビキニ事件から半世紀以上がたちましたが、解明されていないことがまだ多くあります。きょうはアメリカが核実験の状況をどこまで明らかにしてきたのか、どれだけ情報コントロールをしてきたのかを調査しているなかで発見した資料をご紹介します。

一九五四年三月一日のキャッスル作戦最初の実験「ブラボー」が日本で報道されたのが一六日、読売新聞によるスクープでした。翌一七日アメリカは認めましたが、この報道がなければもみ消そうという意図であったことを示す文

(4面からつづく)
書がみつかっています。

被害の過小報告

たとえば、三月一日付文書で、実験に先立つ二月、国内における原子力問題を扱う米国上下両院合同原子力委員会(JCAE)は米原子力委員会(AEC)に「住民を避難させる計画はないのか」と問い合わせたところ、AECは「避難させる計画はなく、放射性降下物が降る可能性はないと確信している」と回答しています。そして被害はなかったとして実験を続行しました。しかしJCAEは「住民二三人と二人のアメリカ人が被曝している」ことを把握していました。

被爆したマーシャル諸島の



高橋博子さん

住民は、AECによる「プロジェクト四・一」著しい放射性降下物にさらされた人間の反応に関する研究」の調査対象にされました。住民の被害を目の当たりにしているにもかかわらず、三月三十一日ストローズ委員長は「住民は丈夫で幸福そうに私には見えた」との声明を発表しています。被害はたいしたことはなく、実験は成功だとういう姿勢を貫いていました。

アリソン大使の本音

しかし第五福竜丸の被爆実態が発覚し「原子マグロパニック」を見たアリソン駐日米大使はようやく四月九日に「遺憾の意」を表明し、ここで初めて「補償」について言及します。公式には遺憾だと言っておりませんが、彼の思惑を示す文書も出てきました。六月一七日付JCAE秘密会文書で「調査船俊鶴丸が戻ってくる前に補償金を支払って解決すべき」と助言しています。(調査は五月一五日から七月四日)つまり太平洋の汚染の実相が明らかになる前に解決した方がいいと考えて

いたわけです。

補償問題は翌年一月交換公文「法律上の責任問題に關係なく米国は見舞金(Gratuity)として二〇〇万ドル支払う」ことで決着しましたが、二〇〇万ドルというのは日本人への補償金ではなく、あくまで「法的には支払い義務はないが金銭的解決の方が安くつく」という発想のお金です。核実験被害に対しアメリカが責任をとったというわけではありません。

日米会議のからくり

被害が明らかになった三月の早い段階から厚生省は被爆調査を実施し、漁獲マグロから放射能が一〇〇カウント測定されれば破棄するという政策をとりますが、一二月二二日、原爆対策連絡協議会食品衛生部会が「マグロはもう大丈夫」と発表し、二五日には検査打ち切りを決定、ついで二八日には調査中止が閣議決定します。この一連の動きの裏には「放射性物質の影響と利用に関する日米会議」が大きな影響を与えていました。この会議は一月二五日、

二九日、日本学術会議の主催で開催されました。米側はAECの科学者と農務省の研究者で政府の科学者でした。

この会議に先立ち、一月二日付書簡(OCB文書)でアリソン大使が会議の出席者に「科学者同士が自由な情報交換」しているだけで「米側が過度に隠し立て」をしているわけではない、核実験問題とは関係ないことを印象づけるのが重要だと助言しています。

アメリカのマグロ調査協会からは、参加した学者へ宛て、「検査中止実現に寄与したあなたとあなたの仲間にお祝いの言葉を贈ります」との手紙もみつかりました。

この日米会議は、日本人の放射線に対する恐怖とアメリカと核実験への反発心を抑え込むために開催された会議であるといっても過言ではありません。

第五福竜丸の被災とマグロパニックは原水爆禁止運動の引き金となりました。これを完全に止めさせることはできなかったものの、ある程度スローダウンさせるための画策

はかなり成功していたことがこれらの文書から見る事ができます。

マンハッタン計画に参加したハンス・ベーター博士からラルフ・ラップ博士への書簡で「機密印というのはこれまでにも発明されたどのような武器よりも強力なものだ」と言っています。私がラップ博士に数度にわたって取材した折りにも博士はこの言葉を繰り返しておっしゃっていました。

被害の事実が機密にされる限り、悲劇は繰り返される恐れがあり、この悲劇に無関心である限り核兵器に依存する社会構造を支えることにつながっているのではないでしょう。核兵器廃絶への最大の敵は無関心なのでないかと感じています。(広島市立大学平和研究所助手、日米外交史、アメリカ史、第五福竜丸平和協会専門委員)

*編注 高橋博子さんが入手した資料についてはグロバルヒバクシヤ研究会編『隠されたヒバクシヤ』(凱風社)で詳しく読むことができます。展示館でも取り扱っています



筆された秋山博一さんに近藤さんを偲び「寄稿いただいた。

近藤康男編著 『水爆実験と日本漁業』を編纂したころ

秋山博一

「水爆実験と日本漁業」

この書物は、一九五四年三月一日のビキニ水爆実験の影響を調査するため、日本学会議内に設けられた放射能影響調査委員会・社会経済班による調査研究報告である。主任は近藤（康男）先生であり、①日本の水産業が被った被害はどうしたメカニズムによって引き越されたのか、②その被害の実質的な帰属は何処か③被害のメカニズム自身を如何に変革して行くか等を重点に書かれた学術書である。東大・静大・水産事情調査所に所属する研究者の三カ年にわたる実態調査を基礎にしてまとめられた。

私もこれに参加していたので、当時の苦い思い出などを記してみたい。

水爆実験の被害を知ったとき、著名な魚類学者さえ「タライイの中にインクを一滴垂らしたようなものだ」と比喩したが、広島原爆被害の広さを太平洋に位置づけると、確かに、第五福竜丸の被害は一滴に過ぎないかもしれない。だが、福竜丸が危険区域より一六〇km（東京・由比・興津）も離れていたこと

を知ったときびっくりしたものである。しかも、被爆より二週間後三月一四日焼津に帰港、乗組員全員二三名が入院したこと、一六日の読売新聞のスクープ記事で知り、更に帰ってくる船が次々と死の灰の被害を受けていることが分かった時、「何がインクの一滴だ」と自分の頭を殴ったものである。

厚生省が、この年の一二月に被災漁船の検査を打ち切ったが、被災漁船八五六隻、原爆マグロとして廃棄処分されたのは四八六トンであった。しかし、初期の三〜五月が一〇五隻、廃棄は一二一トン、一〇〜二月が四〇二隻、廃棄は一五一トンであった。月日が経つに従って被災船も廃棄マグロも増大していったのである。にもかかわらず、検査を打ち切った理由は、未だに分からない。

アメリカの補償金

これに対してアメリカから慰謝料として七億二千万円が支払われた。早とちりの私は、これを見舞金（原爆病の）と理解したが、とんでもない損害補償金であった。原爆マグロの値下がりだけでも二〇

億円余の損失と思っていたから、その三分の一でしかない。検査打ち切り後でも被害が継続していたことを考えると、とても補償金といえる額ではない。

その慰謝料は、七割以上が船主の取り分となり、船員にはわずかに過ぎなかった。しかも慰謝料には所得税が課せられたのである。当然ながら経営の大きいものほど、多額の慰謝料が払われた。大経営のマグロ漁船は大型であり、被災漁場を遠く離れてインド洋方面に魚場を移して経営を維持することができたが、中小船主にはその余裕がなく、汚染漁場であっても、操業せざるを得なかった。このため、廃業に追い込まれた船主も少なくなかったのである。

この慰謝料問題でも、イヤな思いをした。第五福竜丸の船主や乗組員に対する一種のやつかみである。その問題をハッキリさせたいと先生に言ったら、先生は「板子一枚下は地獄の環境だからね」とおっしゃった。誤解されることを覚悟の上で言えば、当時、漁業者が海の事故で死ぬと言

うことは、都会人に即して言えば、交通事故に遭うような日常茶飯事なようなものであった。こうした漁業・漁村の持つ負の側面を十分に分析し得なかったことは残念である。と今でも思っている。現在のようには、保険制度も福祉制度も未発達の時代であったことも付け加えたい。

原水爆の禁止へ

しかし、福竜丸被災を契機に、多くの人びとの苦勞があったが、一九五五年第一回原水爆禁止世界大会が開かれ、第五福竜丸展示館も設立されるという方向へと進んできたのである。こうした動きに私は歴史の大きな力というものを感ずるのである。したがって「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」の久保山愛吉さんの遺言も、半世紀経てもなお、実現にはほど遠いが、必ず実現すると信ずるところである。（水産漁業研究者）

*

近藤康男氏は一八九九年岡崎市生まれ。東大名誉教授、農業経済論、農文協図書館理事長（写真・農文協図書提供）

第五福竜丸・長崎展に 5万人以上が見学

昨年10月4日から12月25日まで長崎原爆資料館で開催された第五福竜丸展には5万人を超える見学者がありました。

ビキニ事件当時漁船に乗っていたという方や被爆者、修学旅行生などからたくさんの感想が寄せられました。

<<会場の感想ノートから>>

◇第五福竜丸被ばくが反核運動の原点であったことを改めて感じました。あれからの時間経過を考えると、「平和」は戦い続けなければ得られないものだと思います。

◇戦争を体験した私にとってこの写真展をみて二度と戦争をおこしてはならないと世界平和をねがうものです。元気で過ごせる日々にあらためて感謝しております(69歳・主婦)

◇昨日も見せていただきましたが会社の休み時間を利用して来ました。「核」は人間には手にあまるしるものです。知らなければそれまでだけ「知らないのは罪」だと感じずにはいられません。もっともっとたくさんの人に観てほしい。(30歳・会社員)

◇第五福竜丸のことも知らない人が増えた。日本が戦争をする国になろうとしている。人間が人間である以上に核兵器の存在を当たり前のこととして許してはならない。第五福竜丸はそのことを訴えてくれている。この船を永久に保存しつづけよう。永久に被ばくの実相を語りつづけよう(東京在住・被爆者)



枚方市平和の日に 第五福竜丸展

3月1日は大阪府枚方市の平和の日です。記念事業として2月24日から3月8日まで枚方市民ギャラリー(サンプラザ内)で第五福竜丸展が開催されます。会期中、映画の上映や講演会も予定されております。問い合わせ:枚方市役所・人権政策室
電話 072-841-1221

ホームページが優秀賞

昨年リニューアルした当協会のホームページが「あたごくらぶ」機関紙コンクール(きかんし印刷)で、情報内容やデザイン機能が評価され、優秀賞を受賞しました。

専門委員の交流会をひらく

第五福竜丸平和協会は昨年よりビキニ事件と第五福竜丸被災等に関する研究・取材をすすめる研究者やジャーナリストなどに専門委員として協力を委嘱しています(現在11名)。「3・1ビキニ事件記念のつどい」にあわせ2月18日午前に専門委員6名と理事・評議員6名が集まり、研究の近況報告や意見交換などを行いました。

お花見平和のつどい 2006

*4月1日(土)11時~15時 第五福竜丸展示館前 入場無料

*八重紅大島桜をかこんで

2001年から恒例となった、東京の被爆者団体や市民団体が参加する「第五福竜丸から平和を発信する連絡会」による「お花見平和のつどい」が開かれます。今年は日本国憲法が公布されて60年。「憲法大好き つないでつないで東京から平和」をテーマに開催します。コンサートや平和グッズの販売、おにぎりコーナーもあります。ぜひお誘いあわせてご参加ください。雨天の際は展示館内で行います。

ご案内

和光大学(町田)市民講座「平和学―被爆・敗戦60年を超えて」

5月から第2・第4土曜の14:40~17:50和光大学の「ばいであホール」(小田急線鶴川駅前)にて市民講座「平和学―被爆・敗戦60年を超えて」(講師―竹峰誠一郎)が開講されます(全10回)。テーマは前半「いま、ヒロシマ・ナガサキ・ビキニを問う」、後半「揺れる日本の平和主義の将来」。展示館へのフィールドワークも予定。受講料(年間)は、一般3万円、高校生6千円。申込・問い合わせは、和光大学企画広報課・担当―小山(電話044-988-1433、kaihou@wako.ac.jp)。

ボランティアの会ニュース

12月18日、5年目をむかえる「ボランティアの会」は学習会を行い、日本被団協被爆者中央相談所長の肥田舜太郎医師から被爆証言と平和への思いをうかがいました。

会では、展示館開館30年特別企画にむけて、過去30年間の来館者感想ノートや送られてきた事後学習文集、手紙などを手分けして読みまとめる作業をすすめています。膨大な分量ですが、それぞれの言葉の書かれた時代背景が伝わるものも多く、その一部が記念誌に収録される予定です。